

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.802 2020

2020年12月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

飼い葉桶に場所はある

日本福音ルーテル広島教会 牧師 立野 泰博

今年はコロナ禍をはじめ、多くの災害がありました。社会的距離をとりながら、つながれない状況の中で寄り添うことの意味を問うてきました。どうしてこんなつらい状況の中で、しかもつながれない状況があるのだろうか。

「人間の痛みとか、苦しみとは何のためにあるのだろうか」と考えるときがあります。神様は何のために、私たちに痛みや苦しみをお与えになるのだろうか。何度も起こる災害や困難の中で、その度に与えられる答えは一つでした。「神様を知るため」です。私たちは痛み苦しみの中で、神様と出会います。そこに神様が共におられるのです。

私たちは神様に守られて生きています。それがあたりまえになると、その存在に気がつき感謝することを忘れてしまいます。今朝も元気に目を覚ますことができた、それだけでも神様からの大きな恵みです。しかし、そこに神様の存在を感じることができません。だから、人は痛み苦しみに出会ったときに振り返り、神様の存在を知るのでしょう。苦しい時の神頼みではなく、私たちに共に行ってください神様を思い起こすのです。

「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」とルカ福音書は記しています。「場所がなかった」とはどういうことなのか。イエス様の誕生にふさわしい場所はどこだろう。私の場所とはどこだろう。みな自分の場所を持っているのだろうか。「ここにいてもいいよ」という場所はあるだろうか。イエス様には飼い葉桶が場所として用意されていました。宿屋には泊まる場所はなかったとしても、飼い葉桶には場所があったのです。イエス様がいらっしゃる場所なのです。どんなところであろうと、そこに世の光が輝いています。そこにイエス様に導かれる人々が集まってきます。その人々はイエス様に仕えるように、苦しみ痛む人に寄り添います。その人々は愛でつながっていきます。その場所を支える人に変えられていきます。

私たちは場所を探します。しかし、探してもみつかりません。自分中心に「私の場所はどこ」と探しているからです。私たちの場所は自分ではなく、キリストがおられるところが場所です。そこには愛があふれています。クリスマスおめでとうございます。

amazon 「みんなで応援」プログラムにYMCAが参画

— ほしい物リストで笑顔をお届け —

Amazonによるプロジェクト「みんなで応援」プログラムが、11月18日（水）よりスタートしました。これはクリスマスや年末年始のホリデーシーズンに、Amazonの「ほしい物リスト」を活用したチャリティキャンペーンで、YMCAもパートナーとなって全国で展開します。www.amazon.co.jp/ouen

各種団体・施設が支援を希望する物資の「ほしい物リスト」をAmazonのサイト上で公開し、プログラムの趣旨にご賛同いただける方々にそのリストから商品をご購入いただくと、応援物資として支援先に届く仕組みです。

2020年は特に、多くの子どもや若者が、豊かな自然体験や、多様な人と出会い交わる成長の機会を失いました。誰もが公平に夢を叶えるチャンスのある地域社会の創造が、今こそ必要です。Amazon「みんなで応援」プログラムを通じて、多くの子どもたちがYMCAで、楽しい冬休みを過ごせるよう、ご協力をよろしくお願いいたします。



熊本豪雨

被災地のいま 熊本県7月豪雨災害支援報告会(10月28日開催)より



7月豪雨災害によって被害が大きかった球磨村は、避難所のある多良木町とは車で1時間以上の距離があります。避難者は自宅へ片付けに帰るにも一苦労です。豪雨により、村内にあった小学校2校のうち1つは水害によって使用できな



旧多良木高校避難所長
熊本YMCA
丸目 陽子

熊本地震では、熊本YMCAが管理する益城町総合運動公園で避難所の運営にあたった。現在は、同運動公園の所長を務める。

り、隣にある、特別養護老人ホームでは避難が間に合わず、入居者14名が亡くなるなどの被害がでています。支援に入るスタッフは、被災状況を視察したのち避難所へ入るように心がけました。

コロナ禍での避難所運営には、3密の回避、検温やマスク着用の徹底、静養室の確保、全国からの応援スタッフのPCR検査義務、メディア取材の制限など、多くの注意事項があります。しかし命を守るために徹底をしながらも、住民の負担にならないような工夫もしました。ウイルスを持ち込まないための外出管理の徹底は、敷地内での防犯対策につながり、著名人による慰問の制限やメディアに

よる取材の制限は、住民たちに混乱のない穏やかな生活をもたらすなど、新たな発見もありました。さらに、コロナ禍でも工夫を凝らし、オンライン音楽ライブ、SNSによる発信なども行いました。

また、YMCAスタッフの得意分野を活かしたレクリエーション体操、歌声広場などでは、「久しぶりに笑ったわ!」と喜ぶ顔がありました。小中学生のプログラミング体験も実施したキッズスペースは、片付けや新しい生活の準備で忙しい大人に代わって、スタッフが思い切り遊び、子どもたちにも笑顔が戻りました。ワイズメンズクラブにご協力いただいた炊き出しは、感染予防の対策をして行い、温かく美味しいものが食べられたと好評でした。

10月31日の閉所を前に、多くの方が新しい生活へ向かっていきます。運営スタッフは「いってらっしゃい」と送り出します。泣きながら「さみしいなあ」と言ってくれる方や、退所後も毎日のように顔を出してくださる方もいます。避難生活が、苦しさや辛さだけで終わるのではなく、人との出会いや喜び、楽しみがあったと思返していただけるよう、最後まで支援したいと思います。

応援スタッフとして活動したユーススタッフの想い

被災地視察では言葉にならない衝撃を受けました。避難所では主に食事を担当し、配膳など住民の方々と接する機会が多くありました。皆さん明るく昔の話や熊本弁を教えてください、楽しい時間を過ごせました。また、作業をしているときの皆さんの「ありがとう」の言葉からは、元気と優しさをいただきました。復興までの道のりで、少しでも力になれたことをうれしく思うとともにすべての方々に安心した生活が戻ることを祈っています。



名古屋YMCA 谷口 みはる

住民の方々の心にどのように寄り添うことができるのかを、常に考えていました。明るく笑顔でいながらも、多くの方は今後の生活への不安や避難所での小さなストレスをたくさん感じていらっしゃいました。応援スタッフとしての自分の役割の一つなのではないかと考えて、住民の方々のあいさつや笑顔で話をすることを大切にしました。私ができることは、小さいことかもしれませんが、今後も住民の方々に寄り添っていきたくと思っています。



横浜YMCA 土屋 陽太

発災から3ヵ月経った避難所では、何より避難生活を送られている皆さんの明るさに驚きました。さまざまな話で盛り上がり、前を向いて進もうとする力を強く感じました。けれど、ある方が「氾濫した日や今後のことを考えて眠れなかった。ご飯も喉を通らず、苦しんで倒れるかと思った」と話されたとき、私は言葉もなかったで顔くことしかできませんでした。「心に寄り添う」——言葉では簡単ですが、自分に何ができたのか、今後何ができるのか、今も自問自答しています。



埼玉YMCA 立岡 智美



避難所での「YMCAらしい」プログラミング教室

避難所で暮らす子どもたちを対象に10月4日(日)と11日(日)の2回にわたって「Amazon Future Engineer」プログラミング教室を実施しました。避難所には小学1年生から高校生まで12名の子どもたちが暮らしていましたが、遊ぶ機会と場所が限られていました。そこで、避難所で暮らす犬をモチーフとしたウェブサイト制作を見てもらい、パソコンを使ったお楽しみ会として興味を持ってもらいました。

初回には4名が参加し、ウェブサイトの作成に取り組みました。まだタイピングをしたことがない小学1年生も「この写真がいい」と選んだり、スタッフのスマホを借りて動画を撮ったりしました。ある日のタイピングゲーム大会では、小学生がスタッフも顔負けのタイピングで優勝しました。この頃から、帰宅後の子どもたちが自然とホールに集まるようになりました。

2週間を通して7名が参加、3名が自作のウェブサイトを完成させました。子どもたちが作ったサイトはご家族だけが確認できる安全な形でそれぞれの手に



自分の好きなモノ、好きなコトのウェブサイトを作りました

残せたことも大きな成果となりました。この期間、避難所で、避難所だからこそ「楽しい」経験と記録を残すために試行錯誤しました。なによりも子どもたちの集まる居場所作りにも貢献できたことが「YMCAらしい」プログラミング教室であったと思います。

在日本韓国YMCA 高 彰希

YMCA国際協力募金使途報告

レバノン・バイルート:時間と天候とのせめぎ合いの中で

日本YMCA同盟は、大爆発事故のあったレバノンYMCAに対して国際協力募金より1,000ドルを送金しました。現地では冬の到来を前に自宅に戻る途をたてています。

現在、レバノンYMCAは12人のユース職員、3人のソーシャルワーカーのほか6人の管理スタッフを配置し、被害を受けた家庭に支援を届けています。暖房機器、冷蔵庫、ガスコンロ、洗濯機などの物資の提供、また、YMCA関係者など日常的につながっている人へは薬の提供も行いました。



復旧活動にあたるスタッフたち

さらにより良い、迅速な対応のために、地域の組織や国際機関と協力しています。レバノン軍(バイルートフォワード緊急治療室)が率いる緊急対応チームと連携し、多様な当事者のニーズ調査を実施し、現在までに35,000世帯中19,000世帯の状況を把握しました。10月末まで調査は継続されます。ユニセフやLebReliefとも協力し、200個の水タンクも設置しました。まだまだ支援が必要な状況は続いています。

高田 望(日本YMCA同盟インターン)